

# 韓国新旧韓屋村の街区および宅地にみる空間特性

李 良善

## 1. 序論

### 1-1 研究の背景と目的

近年、韓国では伝統的戸建て住宅である“韓屋（はのく）”が再評価され、2000年代初頭より、自治体の条例等による伝統的韓屋の保全や北村（ソウル市）、全州など韓屋が集積する地区を“韓屋村”と称する歴史地区として指定されてきた。こうした韓屋の保全活動は一般市民の関心の獲得と韓屋への居住指向へと繋がりが、官民が主体となり現代的韓屋による韓屋村の整備が進められている。しかし、不十分な計画への批判や韓屋が有する伝統性の継承と現代生活における利便性とを両立させる計画の必要性が指摘されている。

そこで本研究では、伝統的韓屋村と新規韓屋村を対象とし、街区の配列や密度、宅地の規模・形状および接道状態、建物配置等に注目した分析により両者の特性を明らかにするとともに、地域や時代の違いによる共通点や相違点等の特徴について考察する。

### 1-2 既往研究

韓屋村に対する既往研究では、歴史的建築物の歴史性と地域性に関する小山の研究<sup>1)</sup>や、韓国近代都市住宅に関する空間構造の変遷に関する金の研究<sup>2)</sup>など立面や住宅の内部空間に焦点を合わせた研究がある。また、韓国の研究のうち、新韓屋村の空間構造に関するShinの研究<sup>3)</sup>も行われている。しかし、本研究のように定量的な街区、宅地、建築物の比較分析、相互関係分析ではなく、諸村の特徴を羅列したにとどまっている。本研究は比較分析だけでなく都市組織と建物間の相互関係まで分析することに特徴がある。

### 1-3 研究の対象

韓屋村<sup>注1)</sup>を立地特性より地域型（リゾート型、田園村型、農漁村型）と都市型（街路型、複合コミュニティ型、団地型）に分けたが、地域型は街区、宅地、接道等の都市構成要素に比べ自然環境により大きな影響を受けることから、比較分析が難しいと判断し本研究では都市型のうち団地型韓屋村を分析対象とした（図1）。韓屋村内の研究対象建物は、韓屋の定義<sup>注2)</sup>に従って木の構造、韓式屋根枠を持つ文化財韓屋、正統韓屋、現代韓屋のみとした（図2）。

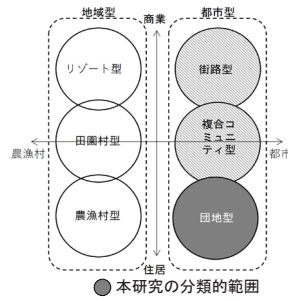


図1 韓屋村の分類<sup>注3)</sup>

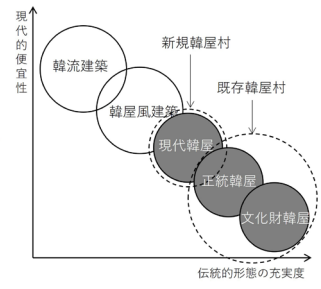


図2 韓屋の分類<sup>注4)</sup>

### 1-4 研究方法

本研究は、以下の方法により分析をおこなった。

1) 分析対象地の選定と範囲の設定：韓国の韓屋村の情報を収集し、伝統的韓屋村は、韓屋密集地、伝統韓屋地区、歴史環境地区に指定された諸対象中、3か所を選定し、新規韓屋村は、韓屋用地に指定（2021年10月時点）された4ヶ所の中で小規模である益山韓屋村を除いた3ヶ所を分析対象として選定した（表1、写真1、図3）。また、各韓屋村の分析範囲は基本的に地区単位計画によって設定された範囲とした。

表1 対象地リスト

村名	自治体	地区名	範囲	形成時期	宅地数	対象地面積	建蔽/容積率
1 BC	ソウル	韓屋密集地	一部	1935~	166	約25,000㎡	60/150%
2 JJ	全州	伝統韓屋地区	全体	1910~	195	約50,000㎡	60/60%
3 GJ	慶州	歴史環境地区	一部	1910~	170	約40,000㎡	60/200%
4 EP	ソウル	韓屋用地	全体	2017~	151	56,500㎡	50/100%
5 SJ	世宗	韓屋用地	全体	2019~	50	25,083㎡	50(80)%
6 GB	安東	韓屋用地	全体	2016~	77	38,737㎡	50/100%

2021年10月基準でEP11個、GB2個の宅地SHPデータがないため分析から外された。



写真1 分析対象韓屋村

2) データ収集：6分析対象地について、国家空間情報ポータルが提供する「連続地籍図」及び「土地林野情報」のSHPファイルを収集（2021年10月）した。

3) 分析項目・内容の抽出とデータ作成：既往研究のレビューにより、韓屋村の街区、宅地、建物配置等空間特性に関する分析項目・内容を抽出し、連続地積図及び土

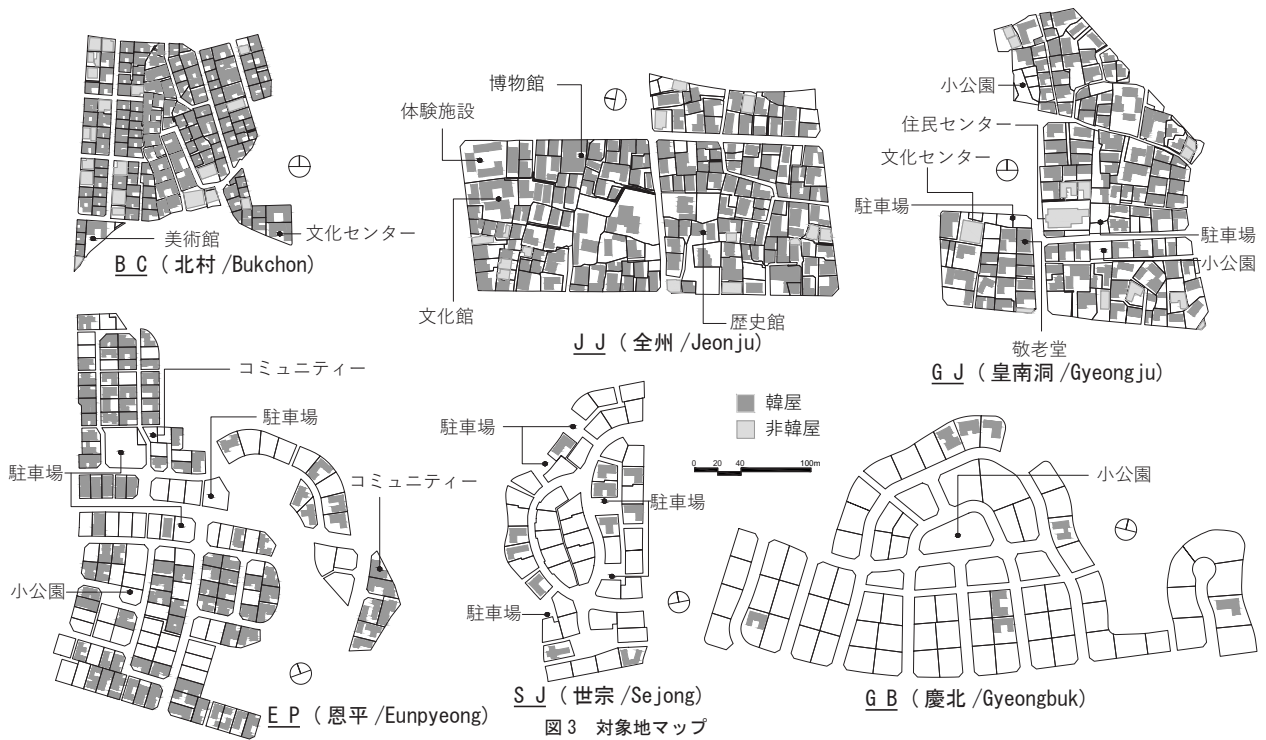


図3 対象地マップ

地林野情報資料を活用し分析用データを作成した(表3)。  
 4) 対象地の比較分析：分析項目・内容により6つの韓屋村の街区と宅地を分析し空間特性を把握した。  
 5) 相互関係分析及び要因分析：宅地、接道、韓屋配置のクロス分析により相互関係を把握するとともに、地域や時代の違いによる共通点や相違点等の特徴について明らかにし、その要因について考察した。

## 2. 韓屋村の空間特性

### 2.1 街区特性

1) 街区配列：街区を構成する宅地の配置により街区配列を類型した。分析対象とした韓屋村には、1列格子型、1列凹凸型、2列格子型、2列凹凸型、不規則型、単一型の計6種類の配列が確認できた(表2)。なお、不規則型は新規韓屋村には見られない。伝統的韓屋村では不規則型比率が18%(BC)、100%(JJ)、87.5%(GJ)あり、BCを除き高比率であった。新規韓屋村では不

表2 分析項目とその内容

	式	概念図
街区	配列	a, a', b, b', c, d
	密度	街区の密度 = $\frac{\text{宅地の数}}{\text{街区の面積}}$
宅地	面積	土地林野情報の面積
	定型度	$STI \text{ 注5)} = \frac{a(\text{宅地の面積})}{a'(\text{最小外接四角形の面積})}$
	縦横比	$WR \text{ 注5)} = \frac{d'(\text{最小外接四角の短辺})}{d(\text{最小外接四角の長辺})}$
	類型	縦横比 $\rightarrow$ 東西型 縦横比 $\rightarrow$ 正方形 (0.0'0.9) 南北型 (0.9'1)
接道	宅地の長辺に接道=横型	横型
	宅地の短辺に接道=縦型	縦型
建築	韓屋配置	E型, G型, D型, M型, その他

規則型はみられず、1列格子型と1列凹凸型の合計が63.9%(EP)、90%(SJ)、35%(GB)で最も高い割合を占めた(図4)。

2) 街区密度：宅地数を街区面積で除した値で算出した(表2)。街区の平均面積は、1,890.2 m<sup>2</sup>(BC)、8,939.4 m<sup>2</sup>(JJ)、4,445.0 m<sup>2</sup>(GJ)、1,031.9 m<sup>2</sup>(EP)、1,556.5 m<sup>2</sup>(SJ)、2,147.3 m<sup>2</sup>(GB)でありJJが最大、EPが最小であった。また、1街区当り平均宅地数は、15.1(BC)、37.8(JJ)、20.9(GJ)、4.5(EP)、5(SJ)、3.9(GB)でJJが最も多く、伝統的韓屋村が新規韓屋村より3から5倍程度高密度であり、BCが最も高密度であり、GBが最も低密度であった。なお、JJ、GJ、EPは、同程度の密度である(図5)。

### 2.2 宅地特性

1) 宅地面積：「土地林野情報」(国土交通部作成)をもとに「道路」を除いた全ての宅地の面積を求めた(表2)平均宅地面積は、BC(124.9 m<sup>2</sup>)が最小で、GB(544.1

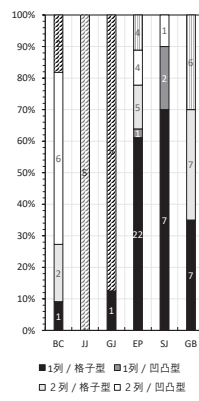


図4 街区の配列

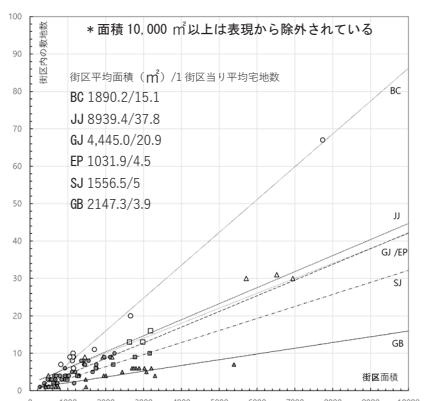


図5 街区の密度

m<sup>2</sup>) が最大であった。また、JJ、GJ、EP は、それぞれ 224.3 m<sup>2</sup>、206.8 m<sup>2</sup>、221.6 m<sup>2</sup> など同規模の宅地が多く、JJ と GJ の宅地面積別割合は同様の傾向であった (図 6-1, 2)。

2) 宅地整形度：宅地面積を最小外接四角形の面積で除した値であり、SHP ファイルの宅地線をもとに最小境界図形を生成し算出した。なお、旗竿地については進入路部分を除いて算出した (表 2)。宅地整形度 1 以上の宅地 (旗竿地) を除いて平均宅地整形度を求めたところ最高は 0.92 (EP) であり、最低は 0.80 (GJ) であった。また、伝統的韓屋村では、0.86 (BC)、0.81 (JJ)、0.80 (GJ) であり、新規韓屋村の 0.92 (EP)、0.83 (SJ)、0.88 (GB) に比べて平均的に低かった (図 7-1, 2)。

3) 宅地縦横比：定型度 0.8 以上の宅地のみ分析を行った。対象とする宅地の最小外接四角形の短辺を長辺で除した値である (表 2)。0.9 から 0.7 をみると、56.1% (BC)、43.8% (JJ)、33.3% (GJ)、43.6% (EP)、35.3% (SJ)、59.0% (GB) であり、縦横比のうち多くの割合を占めた。また、縦横比 1 ~ 0.5 の間が 96.7% (BC)、91.4% (JJ)、89.8% (GJ)、84.2% (EP)、97.0% (SJ)、98.3% (GB) が占めることを確認した (図 8-1、2、3)。

4) 宅地類型：6 韓屋村内の全宅地について宅地整形度 0.8 以上を「整形」、それ未満を「不整形」として区分し、旗竿型は正確な宅地整形度の算定が難しいため別区分とした。また、整形はさらに東西型、南北型、

正方形の 3 つに分類した。さらに、縦横比 0.9 以上の宅地は正方形である (表 2)。伝統的韓屋村では、東西型、南北型、正方形 4:4:2 程度の割合を占め、新規韓屋村は、EP 6:3:1 SJ 6:2:2 GB 1:8:1 程度で異なる傾向を示した。また、GB は南北型が最も高い割合を占め、他の韓屋村と傾向が異なる (図 8-3)。

5) 宅地接道状態：SHP ファイルと航空写真をもとに各宅地の接道数、位置、幅員、接道状態 (長辺接道、短辺接道) により、接道を基準として宅地を横型、縦型に分類した。なお、正方形宅地と 2 面接道宅地は除外した (表 2)。BC、SJ では、横型と縦型の割合は同程度であり、また、JJ、GJ は縦型が 76%、61% で横型に比べやや多く、さらに EP は縦型が 98% を占め GB は横型が 86% を占めることが明らかとなった (図 9)。

### 2.3 韓屋の特性

1) 韓屋配置：代表的な韓屋配置には、「— ‘eu’」字 (E 型)、「ㄱ ‘giyeok’」字 (G 型)、「ㄷ ‘digeut’」字 (D 型)、「ㅁ ‘mieum’」字 (M 型) があり<sup>注6)</sup>、現代型韓屋には丁字形式などの配置がみられたため、これを「その他」として計 5 つに分類した。なお、非韓屋については分析対象より除外した。また、韓屋の別棟は一つの韓屋として取扱い、韓屋と非韓屋が混在するものは韓屋のみを分析対象とした。さらに、一宅地内に複数建物が無秩序に配置されている場合や特殊な配置形態の場合は「その他」として分類した (表 2)。

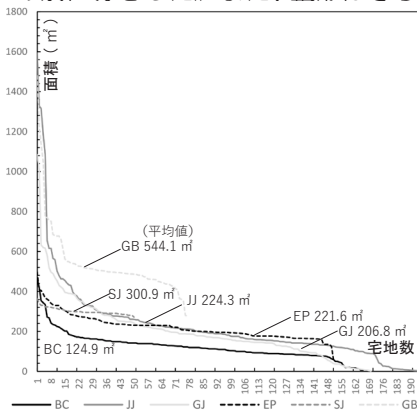


図 6-1 宅地の面積

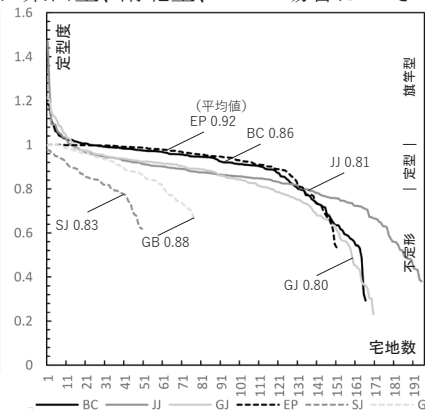


図 7-1 宅地の定型度

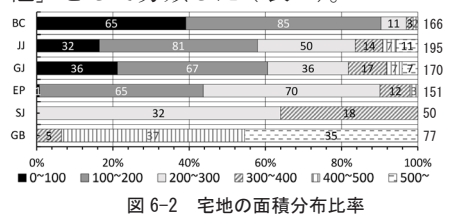


図 6-2 宅地の面積分布比率

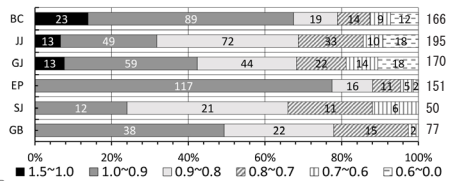


図 7-2 宅地の定型度分布比率

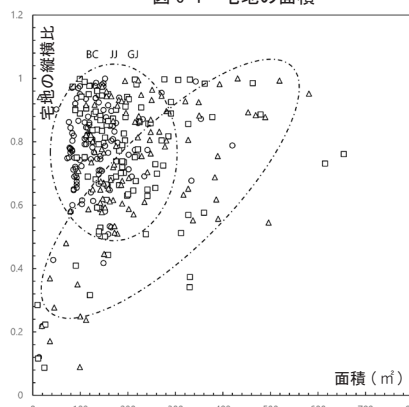


図 8-1 宅地の縦横比と面積 (伝統)

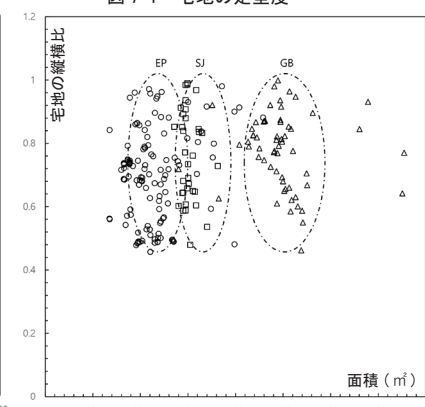


図 8-2 宅地の縦横比と面積 (新規)

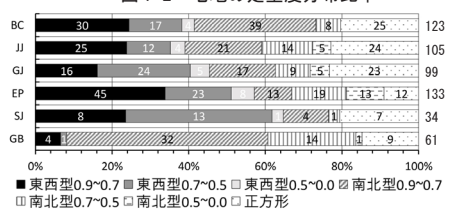


図 8-3 宅地類型と縦横比

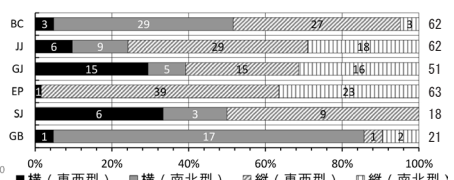


図 9 接道基準による宅地類型 (宅地類型)

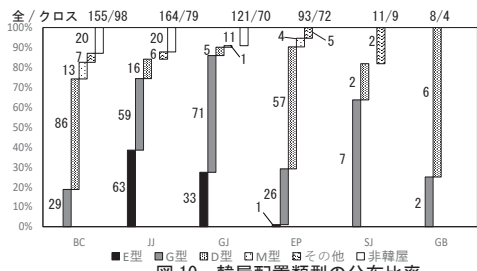


表3 分析例

区分	内容
住所	嘉会洞 31-38
面積	128.9 m <sup>2</sup>
最小外部四角	139.5 m <sup>2</sup>
定型度	0.924
縦横比	0.766
宅地類型	南北型
接道	1(W)
韓屋配置	D-2

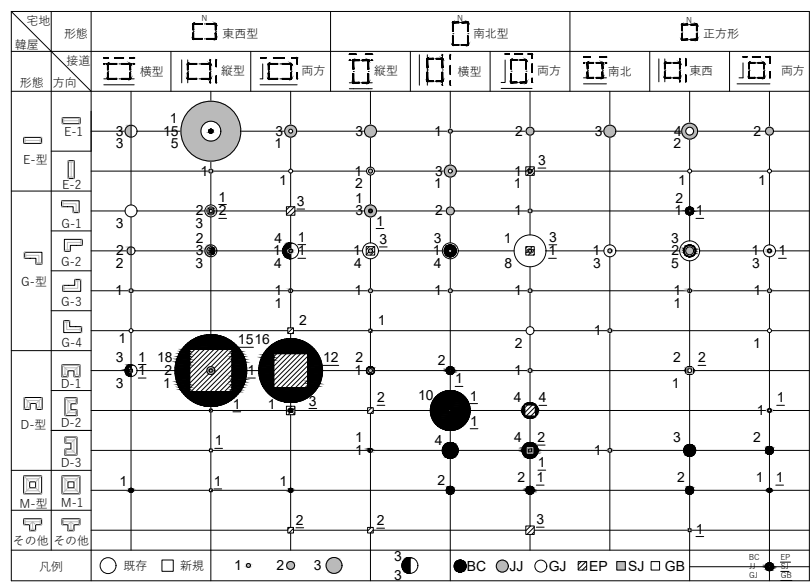


図11 韓屋配置と宅地のクロス分析

韓屋配置の分析に先立ち韓屋と非韓屋の棟数を把握したところ、伝統的韓屋村では、非韓屋がBC、JJ、GJで約1割だった(図10)。これは、建築様式の制限や規則がない地区や時期において建築されたことによる。また、新規韓屋村では韓屋のみ建築を認められていたため全て韓屋であった。韓屋配置をみると、韓屋村全体では、G型(BC29棟, JJ59棟, GJ71棟, EP26棟, SJ7棟, GB2棟)およびD型(BC86棟, JJ16棟, GJ5棟, EP57棟, SJ2棟, GB6棟)が多い(図10)。そして、伝統的韓屋村ではE型がJJ(63棟)やGJ(33棟)など多く擁するものがあること、そして新規韓屋村では、E型が1棟しか見られない。加えて、D型は、全韓屋村で見られるものの、BC(86棟)やEP(57棟)などソウル地域韓屋村で棟数が多いことが特徴的である。韓屋配置は、オープンスペース(以下、マダン)を中心に1~4面を取り囲む程度によって形が決まるマダン中心の建築であることが分かる。

### 3. 宅地の形状及び韓屋配置のクロス分析

- 1) 伝統的韓屋村: BCの場合、分析対象98棟のうちD-1型43棟(東西型37棟)、D-2型15棟(南北型14棟)が多く、JJでは、分析対象79棟のうちE-1型26棟(東西型21棟)、G-2型12棟(東西型6棟)の順で多かった。また、GJの場合、分析対象70棟のうちG-2型36棟(南北型18棟)、E-1型11棟(東西型9棟)の順で多く見られた。さらに、東西型宅地の場合はD-1型、E-1型、南北型宅地の場合はD-2型が多いこと、そして、宅地の類型に関係なくG-2型がみられた(図11)。
- 2) 新規韓屋村: EPの場合、分析対象72棟のうちD-1型30件(東西型28棟)、D-2型12棟(南北型7棟)の順で多くみられた。また、SJでは、分析対象9棟のうちG-1型3棟(東西型2棟)、G-2型3棟(各1棟)

の順で多かった。加えてGBでは、分析対象4棟のうちD-1型が2棟であり、EPでは東西型宅地の場合はD-1型、南北型宅地の場合はD-2型の棟数が多い傾向が見られた。なお、SJ、GBについては、分析対象棟数が少なく傾向分析に限界があった(図11)。

3) マダン: G型およびD型の韓屋配置を有する宅地について、開放域(マダン)の方位に注目して分析をおこない、南183棟、東108棟、西50棟、北17棟であること明らかとなった(図11)。

### 4. まとめ

本論では、韓国新旧韓屋村の構成要素の比較分析によりその特性を明らかにした。そして、両者の共通点は、宅地の縦横比(1~0.5)、韓屋G型、D型の存在であること。また、相違点は宅地面積の差(旧: 100 m<sup>2</sup>~330 m<sup>2</sup>、新: 200 m<sup>2</sup>~550 m<sup>2</sup>)、韓屋配置の変化(新: 韓屋E型の不在)であった。さらに東西型宅地は韓屋D-1型、E-1型、南北型宅地では韓屋D-2型が多い。これにより、韓屋の面積変化はあったが、マダンを作るために宅地の縦横比は保たれてきたことが分かる。

以上の結論は、韓国新旧韓屋村の特性の理解や今後の計画や整備のための有益な知見となることを望む。

【補注】  
 1) 法第24条第1項による支援の対象は該当する地方自治体の条例で定めるものの、韓屋村は一団の範囲内で韓屋が10戸以上有機的に連携されていなければならない。(韓屋等建築資産法施行令第17条第1項)  
 2) 「韓屋」という主な構造が柱、梁及び韓式屋根の枠でできた木構造で、我が国(韓国)の伝統様式が反映された建築物及びその附属建築物をいう。(国土交通部)  
 3) Shin Chi-hoo, Jin Tae-seung: A Study on the Problems and Improvements of Hanok Village Projects, AURI-2016-9, 2016.9(表を参考にして筆者が作った図)  
 4) Jeon Bong-Hui: 韓屋の定義と範囲, Brief on Hanok policy (Republic of Korea) Vol. 2, 2011.11(図を一部筆者が修正)  
 5) Lee In-Sung, Lim Sang-Jun, Kim Choong-Shik: Analysis of the Effect of parcel shape on the Development Density, Journal of Urban planning (Republic of Korea) Vol10 No4, 2009.12  
 6) Yun Jang-seop: 韓国建築史, 東明社, 1975, pp.64~68

【参考文献】  
 1) 小山智, 小浦久子: 歴史的建築物の歴史性と地域性に関する研究(韓国ソウル市北村地区嘉会洞における建物実態調査より), 日本建築学会近畿支部, 平成17年度  
 2) 金廷珉, 郭東潤: 韓国近代都市住宅における空間構造の変遷に関する研究(都市型韓屋を中心に), 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2019.9  
 3) Shin Chi-Hoo, Kim Byoung-Jin: A Study on the spartial organization of neo-Hanok Village, Journal of Architecture History (Republic of Korea) Vol30 No2, 2021.03